



陰本梅芸術家

九

旅  
180  
9



13  
180  
9





梅之全四本衛 梅花春水卷之三  
物語 後篇

東都 南仙笑楚滿人編述

身拾五韵

怨鬼再苦集

篋丈太い小紫が詞何とやうに疑がこけまは庭に悲ひと振を  
窺ひし小紫は遠らば権八は操かきて二京の密を渡りしやま  
ゆりねに任損ぐくろりと密は爰と逢ひて縁で交まると悪規いも  
四五輩をまねき今宵云々の聲あまは喧嘩し得るを子四兵衛  
権八が飯路は待伏お殺して妹が仇をす且ハ我が寤覚を安く  
あてくまごご言ふくめて其身ハ密の隠家へとて取らぬ影  
さうきくす子四兵衛ハ這由と小梅も告知を又と浦屋の長

東都  
南仙笑楚  
滿人編述

180  
A











是別人のあらず主人龍次

目下は上座の押直

〜知くを何の事とせしや

業よりいふるは身といひ袖助

娘を親んまゝにうらむにせむ

今日も御風流心よかるま

糸くんと思ひ〜所へ子四を

恙らぬは酒とを誦く老の

龍次郎も最面さく何と

源氏流ハ更な氣もつゝす

〜

今もいふとく

〜

病せ

三月日

〜

〜

〜

〜

〜

定めく娘山は素もつゝがるるべし。世ふ巷鏡など偽りともるものなり。

此の間も胸を痛やくこそ易くねさるい(世の形のるは)緯の言

ののるまど。一夫虚を述べく美大実を述べくとから針などある

まも捧むごよいの世のらひ曲輪もく情死せし契情もて

有〜やと回るつらさふ三箇ハ胸もたりのさく憂也ひ子四流ハ

涙をとらひ源氏流袖ぬよお向ひ言ひ止むへき緯るらねハ緯の

子細白地は物浴つたべらう〜のうも街の鏡は遠く山は東

こと推はといふ人と情死と相見たり故ふ驪山逸月寺といひ

蘭若は両箇が死骸を埋み葬し比叟塚と名づけく末の世までも

煙の死よまらまらひ貞女の境曇くぬ標を世の人ふまらせんとせし緯











紫雲。小紫の推しと情死せしと世ふくしとあるも敵よむとあるま  
 さる。海さしやあのみすやあつと泪と俱は物結まハ源義房袖外ハ  
 悲歎の涙よむせびまら。源次郎子四義房が厚情と感づける子四  
 義房再び源義房袖外は向ひりやう其時直は景文太とある  
 づりくまで。小紫の情あつ痛者四郎の刀と水姿鏡二種ハ  
 宝ふくび源次郎君の心は入りも全く小紫が勤切るまは  
 暫くぞと景文太の命を取らま。さきこそこの恨んがせは彼も  
 何国へ邊矣くまは遠くも去らず。かまのけは辺は毎回のま  
 庭は告る者あまの今更ハ見當り次第仇討まはと借とては身  
 を訊ね小紫どの縁を結り具ハ袖外が病氣をも訪ひ御くま

間ひは源義房の敵の影もぞうねしと小梅のうらとす来りくと。  
 子細づつあま告て頼みけま。源義房ハ一様あまおまはと何が  
 借袖外とひひ小紫とひひ一方あまは身はあがぐる唐翠の血  
 家のひひ影も。りもまはまは家よ止り承く敵の影もと探り入  
 りと信やふ管待あま源次郎子四義房夫婦ハ大は歎ひ  
 こまらりして源義房が方あるとて日毎の表とつま粧をかへ  
 景文太が影もまら。りもあけるまの借あれた雨心の景文太ハ  
 其後の藤へも往て家ハ隱居して世のさるまらうひ。よ。子四兵  
 衛源次郎も何国へ往やけ辺りまらうけま。けま。借ハ  
 我形を隠し。遠国へまら。りも。當座ま退き。まら。







怨も其れも甚くす。さるで痛もせざるけし。バ只見ふく死ぶんの夏  
 るまどとすまも江村上とあぶ。身ふの返く便く。其後の治癒  
 も加へ。その終ふして。お捨あきまけまど。次郎も子四喜湯水  
 世も存命く。あらえ限りの誓へ。吾が相捨の誓りの。そのも。枕を  
 高へして。床難しく。よく渠を。在家とさ。求め。蜜は。さ。ら  
 して。腹の病ひを除く。よ。あ。つ。と。部下。言。け。き。ら。其。れ  
 事と。採。求。め。け。る。或。日。一。人。の。小。織。簀。文。太。又。向。ひ。今。日。を。う。す。も  
 葛飾の辺り。あ。く。彼。の。子。四。喜。湯。を。見。け。ま。ど。あ。つ。の。く。往。と。く  
 こ。その。在。家。を。見。届。く。あ。ま。の。お。中。て。内。あ。小。梅。次。郎。も。居。り。採  
 子。の。と。洋。よ。告。る。あ。七。簀。文。太。ハ。大。き。な。飲。び。盛。り。失。た。ん。の。と

其もぞちぞむくしけ。

第拾六回 孝子建本懐

簀も子四喜湯次郎亦一旦ハ義おとろく簀文太を見遷せし。のち。  
 さ。あ。く。其。の。事。を。採。求。め。と。雖。あ。つ。の。容。を。見。る。も。理。る。哉。簀  
 文。太。ハ。怨。魂。の。お。に。相。負。の。う。り。の。ま。た。途。中。ふ。く。う。や。面。々  
 念。の。た。と。も。い。ろ。そ。の。簀。文。太。と。も。困。む。と。も。織。入。あ。く。え。や。か。の。り。け。は。子。四。喜。湯  
 八。路。身。ね。あ。く。み。或。日。次。郎。の。向。ひ。け。り。斯。く。日。毎。は。遠。道。を。徧。回。し。て  
 簀。文。太。の。行。来。を。採。求。と。ま。ま。さ。る。の。當。地。中。居。ら。さ。る。と。見。入。り。の。それ。を。い。ろ  
 ころ。當。地。と。あ。ら。ん。の。勢。し。て。功。あ。私。を。幸。ひ。用。ひ。の。も。あ。ま。の。後。念。の。り  
 俣。屋。お。採。の。向。は。皆。く。星。と。こ。も。さ。が。く。や。へ。後。念。ハ。敵。意。の。地。白。ま。り



簞文太陽居く便りよ死すもあはれ彼地はあらんも斗りく君  
 ふい尚も當国よむとけくさぐらひひその内ふハ袖父る病ひも本服  
 まんけまぶすて後袖父と同なるしひひ静よ緒国を尋ねるはく  
 育十六本腰とどけるまゆのりあらし我曲守のうむらうく  
 以刀と謹み木も董も心とつけく必據あがま一もまハ忘れて  
 權受とあご一のふへうすと最るまぐと言残し子四三清ハ数里ハぬ  
 斯くて曲守よハ次郎袖父小梅源清湯赤ハ日毎よ子四三清が安  
 とまも居る折も秋の初中と何とさく表まどりのふまびる  
 又爰ハ後が産のむりあハ似も申る前ハ隅田の流に流く閑情  
 しんとうさるは僻地さるは寂莫とてその妻しき夕暮よ小梅ハ

龍次郎ふ向ひ今宵ハ匹見君浦右エ門さるのハ連夜ひまろりの自  
 向と持佛の扉あひひつた香花はゆる折も表の方よ高き是  
 ハ諸国の法場ハ六十六部の大系ハ妙典を納めたと大願を發起く  
 遠道と着縁さる来門よてひが今宵の病を取り損ひ難き及  
 びたる程ハ何季屋小屋の隅よると一夜を明させるとさる  
 こまようくとま功徳ハるいとまぐく山精ハ龍次郎をかへりけんく  
 君志何とあまのや匹見君の連夜よ當り行暮しくるハ旅路の  
 宿のさるひらんと毎下よせんも情さるはぬまぐ在る一夜の命を  
 算まらうとまるとも子細ハあらし源清どのハ曲守さるら袖  
 ぬどの志何あらんととされて袖父何らさる親父どのが居らすと







一ト間よ入のぬかぐて小梅の絶たを起りつゝのよや今日の源流  
 も例ふるは既ののちとておぼふまふ子四時満る今日明日の善悪  
 は一度の既ののちとておぼふまふ子四時満る今日明日の善悪  
 もやいふゆるる夏の間つゝかゝる時の憂を拂ふも常酒のりぬの  
 まゝに夏あつて一幸ひ旅僧も泊りぬいゝまづ一ト走の村に酒肆  
 もてこゝるむごよ袖交どつゝ只二人心細くもあいらんとおぼし  
 としひろけく小梅の忙ぐれ〜走のさつぬは二人入の顔とあはせ  
 りのら顔とあはせ目おぼやけ錦をかざり本領安堵する夏まで  
 倘も我く運拙く兼文太がふるお返の討おせ〜と〜と〜と〜と  
 兼文太が病をきる夏もあつて我が一里埋木の花咲きもあつたの上

冥土の兄へ何とぞい見。只一刻も迷く兼文太とあを二種渚とも本  
 貫へ持来してあつて唐琴の家を起したきもの哉と〜と〜と〜と  
 碎くちり外面の方よ車の音きこ〜と〜と〜と〜と童の舞動  
 揺ゆきでま去る体は離れ何のゆゑこのひあがりて月をあは  
 見るもいおせた一箇の源流と車にきき〜と〜と〜と〜と  
 たるふとぞありけり。既次郎のこま〜と〜と〜と〜とある法儀一や宿世あ  
 らく〜と〜と〜と〜と業病よ苦しむを食さぞ候あ〜と〜と〜と〜と  
 今宵はあつても亡兄の忌日のまづ〜と〜と〜と〜と今宵は我志日  
 入ま〜と〜と〜と〜と外面持出の〜と〜と〜と〜と今宵は我志日  
 母の〜と〜と〜と〜と子んとする顔とを食いつ〜と〜と〜と〜と  
 母の〜と〜と〜と〜と子んとする顔とを食いつ〜と〜と〜と〜と





柳舟不夜天



浮めゆゑハ唐琴蔵次郎ぬゝとしてその頃麻を餅佃志のひら  
 権八と替名志のひら一人あゝまやとひらよ流次郎ハ大は替名  
 妻一きよのを知るうらつむらうらま一奈何ふも流次郎といふの  
 ろが去る頃ハ子細多と推八と替名一りしがお毎ハ何人よ  
 ちてかろ妻一きよとをかりまのや彼の片願山は餓るる人のことひ  
 ろるその俗性を破まりと浩と回ハを餐ハひらく西眼をま  
 だき実や天網炊く蹴ふと漏らさびとやうんはまぢるのの  
 汝よりなる因果報の理証なきふあふす柝も山子ハゆきが仇と柝  
 らひひの旧鳥袋丈太といふものなりと破く警く流次郎丈太  
 猶も落付く初く自ら名をたれまらうらハ遊びま志業すあふす志で

小紫がゆきもくも破のひつらにが我父も原よりある武士あぐ度目平次  
 左つといつて者ありしが我ハ初め中て父母ハ別は流をさる  
 よみ其中よる因信別ふくゆき見る浦右門どの令室棧の  
 と密通一妻藤花を殺一其後笛吹峠まで兄浦右門どのま切  
 害ひくそ且てより又も諸国を編むま一四男麻山の城まところり或ハ  
 株桐柄組の使客とるの困心とを名して曲論を俳回一金浪紋  
 字を探め人の命を屠つるの殺人とりハ敷をまふす爰は流く  
 その執ひまるとして見ゆみとく世も稀なる業病とけく袋丈太  
 とも困心とも見まらるる死は我より流次郎一一期てハ世ハ存  
 命ハひらけまらるる爰は流く爰は流く爰は流く

梅花春水後卷之三

十一















梅七春大後三



梅七春大後三

十七



太き刃て来らるるにまよひ。 間のうちには髪高く「お入も入も  
 縁骨ゆかむと申すはうらやま。 一。 首のなまのまはうらやま  
 知るひは縁骨のよむまはうらやま。 一。 首のなまのまはうらやま  
 の家後唐琴浦をあらうとて。 金巻渡次郎のまはうらやまの食ひ  
 海とよむまはうらやま。 一。 首のなまのまはうらやまの食ひ  
 浦をあらうとて。 金巻渡次郎のまはうらやまの食ひ  
 次郎のまはうらやま。 一。 首のなまのまはうらやまの食ひ  
 災はうらやまのまはうらやま。 一。 首のなまのまはうらやまの食ひ  
 おもあはうらやまのまはうらやま。 一。 首のなまのまはうらやまの食ひ  
 一。 猶又も四喜浦のまはうらやま。 一。 首のなまのまはうらやまの食ひ

ては貴の子のまはうらやま。 一。 首のなまのまはうらやまの食ひ  
 先達とて子四喜浦のまはうらやま。 一。 首のなまのまはうらやまの食ひ  
 小梅がまはうらやま。 一。 首のなまのまはうらやまの食ひ  
 まはうらやまのまはうらやま。 一。 首のなまのまはうらやまの食ひ  
 殺せし長吉のまはうらやま。 一。 首のなまのまはうらやまの食ひ  
 て存命ありや招魂の法とやらん。 一。 首のなまのまはうらやまの食ひ  
 あつあつとてまはうらやま。 一。 首のなまのまはうらやまの食ひ  
 禪師のまはうらやま。 一。 首のなまのまはうらやまの食ひ  
 まはうらやまのまはうらやま。 一。 首のなまのまはうらやまの食ひ











